

自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究（2）*

—四国遍路体験者のケース・スタディー

藤原 武 弘**

問 題

スペインのアンダルシア地方にエル・ロシーオ巡礼と呼ばれる巡礼がある。ガダルキヴィル河が大西洋に注ぐ河口の湿原帯のエル・ロシーオ村、1200年頃、大木の洞穴のなかに幼な子を抱いた聖母像が発見されたことが契機で巡礼が始まった。復活祭後の七週間目の五月初旬頃、アンダルシア地方のあらゆる町や村から馬車や幌馬車がエル・ロシーオ村を目ざす。普段は無人村に近いこの村が、この一週間だけ95の *hermandad*（信徒巡礼集団）で賑わう。筆者は1991年から1992年にかけて、セヴィリア大学に留学した時にはじめてこの巡礼のことを知った。他にもイベリア半島には、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラ、ポルトガルにはファティマ巡礼がある。ピレネー山脈の麓のフランスにはルルド巡礼、またイスラム教のメッカ巡礼、キリスト教のエルサレムやローマ巡礼等、世界には数多く巡礼がある。また、日本にも伊勢参り、西国三十三カ所巡礼、四国遍路といった巡礼行動はあるので、「文化や社会の仕組みが異なるにもかかわらず、巡礼行動という類似した現象が生じるのはどうしてであろうか？」という素朴な疑問が筆者には生じた。更に巡礼とは本質的には苦行と孤独の行為に思われるので、なぜそのように負の強化因を伴う行為を目ざすのか？学習心理学の理論では説明ができないようにその当時は思われた。

ところで、巡礼とは、宗教上の所定の聖地を参拝して回る信仰行事を意味する。梶原（1994）によれば、聖地とは生者と死者を繋ぎ、人間と神霊の交流を促す場、巡礼とは、個々人の苦悩を宇宙

のなかに顕在化させ解き放つ行為である。また巡礼の形態に注目すると、四国八十八カ所遍路や西国三十三カ所巡礼のように、次々に霊場を巡回歴訪する円還型と伊勢参りや熊野詣でのように特定の聖地をひたすら目指す直接的往復運動型の巡礼に分類できる。キリスト教、イスラム教の聖地巡礼は、往復運動型であり、インドでは円還型、日本では往復運動型と円環型の両型がある。また藤原（1999a, 1999b）は、巡礼行動の次元として、個人的—集団的、父性的—母性的、自己完結的—手段的の三つの次元を提唱し、主にイベリア半島における巡礼行動の分類を理論的に試みている。

わが国における巡礼行動の古典的研究としては、前田（1971）が西国および四国の巡礼者の実態を納札や質問紙を基に調査を行っている。その結果、巡礼者の出身地、性、年齢、職業、宗教といったデモグラフィック要因との関連や実態は明らかにされているが、その心理学的なメカニズムは明らかにされていない。また、青木（1994）は御岳巡礼について研究を行い、巡礼行動を個人が改めて自分というものの存在を確認する場、つまり自己覚醒の場としている。更に彼は、自己覚醒の面だけでなく自己について話す、悩みを他者に打ち明けるといふ、自己提示の側面が存在することを自己の体験から指摘している。

本研究の目的は、聖地を巡礼する空間を場として把握し、そして、巡礼行動を自己過程の変容という視座から社会心理学の方法を用いて明らかにしようとするものである。巡礼研究は次の三つの側面から可能なように思われる。

1 文献的研究 各巡礼の歴史、発生、巡礼行事の現象を調べることで、歴史的、比較文化的視点から、各巡礼行動の類似点、相違点を明らかにす

*キーワード：巡礼行動、自己過程、四国遍路

**関西学院大学社会学部教授

る。また小説や物語や美術に描かれた世界の巡礼行動を内容分析することで、巡礼行動の意味を探るといふ理論的研究。

2 巡礼者を対象に大量の質問紙、面接調査を実施し、社会心理学の側面から巡礼行動の実態と心理構造を明らかにする。

3 巡礼体験者の深層心理の側面をケース・スタディ法によって解明する。

ここでは第三のケース・スタディ法を用いて、四国八十八ヶ所の遍路体験者を面接した結果について報告する。

四国八十八ヶ所遍路は、弘法大師信仰に基づくもので、大師の縁の地を巡歴する一種の聖地巡礼である。徳島県鳴門市にある第一番霊山寺から高知、愛媛を通り、結願所である香川県の大窪寺までがその行程で、距離にして1148.4kmである(宮崎、1997)。徳島県(阿波)二十三ヶ寺の霊場は「発心の道場」、高知県(土佐)十六ヶ寺は「修行の道場」、愛媛県(伊予)二十六ヶ寺は「菩提の道場」、香川県(讃岐)二十三ヶ寺は「涅槃の道場」と普通呼ばれている。これらを順にまわることで、弘法大師が仏門に入門し、入定するまでの足跡をたどることができる。一般に「遍路」とは、その八十八ヶ所の行程を御詠歌をあげながら巡拝すること、またはその巡礼者をいう。御詠歌とは寺を巡拝する人が、仏をたたえて歌う歌のことである。今日も四国の「へんろみち」では「南無大師遍照金剛」と書かれた白装束に草鞋履きで、鈴を振りつつ、菅笠には必ず「同行二人」と書いて、金剛杖をつき大師と共に歩いているという、信仰を示す独特の姿をみることができる。遍路中は金銭や米などの報謝を受け、霊場の印を御朱印帳や白衣に押し回し、この功德によって死後の幸福を信ずるものであると言われている。巡礼中の金銭や米などの報謝を「接待」というが、これは宗教家に接待することは、その行為をした庶民自体も彼らの願望を叶えてもらえるという素朴な信仰に基づいている。接待は四国では特に盛んであり、これは遍路に接待することは、とりもなおさず弘法大師に接待することであると考えられているからである。接待の例に見られるように、弘法大師信仰は四国に強く根付いている。

八十八ヶ所をすべて徒歩で回った場合は、約一

ヵ月半かかるといわれる。日常生活を離れ、聖なる空間での体験により、何らかの心理的变化が観察されるのではないだろうか。近年、団体バスによる集団遍路や、自家用車やタクシーなどでまわる、いわゆる「大名遍路」など、遍路の方法は多様化している。年間十万人とも言われる遍路の中で、徒歩遍路体験者は1%に過ぎないと推測される。第一番札所、霊山寺の住職芳村(1999)の記録によると、平成元年(1989)で137人だったが、昨年(1998)は1261人に増えている(徳島新聞、1999)。ただ、長田・坂田(1998)の調査では、徒歩巡礼者は10.9%であり、また徒歩による遍路経験では、「歩いて通し打ちをしたことがある」2.9%、「歩いて区切り打ちをしたことがある」10.6%で、芳村の記録とは符合していない。不一致の原因は、彼らも指摘していることだが、彼らが採用した調査手法が宿坊利用者自身の応募による有意抽出によるものであろう。つまり、この調査方法では遍路行に関心の高い遍路修行者が実際よりも多く抽出され、逆に観光遍路者などの非修行遍路者は抽出されにくいためであると推測される。

本研究では、時間的余裕を要し、肉体的、精神的苦痛をも伴うといえる徒歩遍路に着目した。その理由として、約一ヶ月半の間毎日何時間も歩くことは、それだけでも普段の生活とは全く異なる体験を経験する。一人きりで歩くことによって孤独感を感じたり、地元民の接待により他者への感謝が生まれるかもしれない。また徒歩という単純な身体動作を媒介として、自己の精神面への省察が深くなされる可能性がある。換言すれば、藤原(1999b)も指摘するように、巡礼中に生起する様々な体験、すなわち、巡礼中に生起する他者との *interpersonal communication*、自己との *intrapersonal communication*、巡礼路や自然環境との相互交流、そしてこうした過程の帰結としての自己確認、自己強化、自己変容等が観察されるだろう。自己過程を経験するなかで、何らかの心理的な変化、とりわけ新たな自己覚醒の芽生えや自己認識の変容がみられるのではないだろうか。

巡礼とは一種の通過儀礼であり、分離、過渡、統合といった典型的な系列をとる(Genep, 1909)。巡礼とは、各人が住み慣れた日常

から聖地の非日常へと旅する「分離」、聖地で体験する境界的な状態である「過渡」、新たな自己同一性を獲得し、普通の社会生活、家族生活に戻る「統合」を体験する通過儀礼である。聖の世界に入っていくためには、外見的に特別のしるし(ロザリオ、帆立貝、白装束、金剛杖、数珠等)を身につけ、行動面では食物のタブー(精進)や他のタブー(一時的禁欲、性、十善戒等)を守る必要がある。従って、巡礼中は一種の変身状態にある。従って、日常性への回帰の後、変身の影響が残効効果として見出されるかもしれない。

四国遍路に関する手引書、つまり実際に「お遍路さん」として四国を巡拝するための案内書は多数あるが、四国遍路に関する社会心理学的な先行研究は全く行なわれていない。社会学的研究として前田(1970)の研究があるが、それは四国遍路の歴史や実態調査にとどまっている。しかも今から20数年前の研究でもあるので、現在では実態は大きく変化していると考えられる。最近では長田・坂田(1998)の社会学的研究があるが、遍路者の内面の心理や機微に深く光を当てた研究ではない。換言すれば、心理学的な自己の変容過程について明らかにしようとした研究は皆無である。

そこで本研究では、四国八十八ヶ所遍路体験者の遍路前と遍路後の心理的変化の事例研究を行うことにした。遍路前と遍路後の心理状態の変化を知るため主に遍路の動機と、遍路中の感情状態、遍路中の心の支え、自己変容等について質問し、探索発見的立場で事例研究を行った。

方 法

調査場所 和歌山県伊都郡高野町高野山

調査対象者 徒歩遍路体験者男性7名(うち6名は高野山在住、うち1名は三重県在住)平均年齢46.4才

調査方法 個別面接形式(調査対象者の了解を得てテープレコーダーに会話内容を録音させてもらった。)ただし1名は都合によりファックスでの回答となった。

調査内容 実態的側面(年齢、出身地、回数、所要日数、経費、家の宗教、接待の内容、遍路の目的)、心理的側面(遍路の動機、遍路中に感じた

こと、辛いときの心の支え、遍路を終えて自己の側面で変化したこと)

結果と考察

7名の遍路体験者の実態的側面について要約したのが表1である。また表2は心理的側面についてまとめたものである。

はじめから予想されていたことだが、やはり調査対象者が全員僧侶だったので、結果には宗教の影響が色濃くみられた。各個人の傾向を簡単に描写してみよう。

調査対象者A(以下A)は、四国遍路を行った動機が「お釈迦様の悟りに達したい」という宗教色の濃いものだったこともあって、常に仏や弘法大師を意識し、物事を感じる傾向があった。そして変化としても、より宗教心が深くなっていった。

調査対象者B(以下B)は、人の薦めで遍路を始めた。それほど自発的ではない動機だったが、人の心にふれ自分を見つめたり、先達としての弘法大師を常に支えにしながら宗教家としての意識がより芽生えた。

調査対象者C(以下C)は、一般人が行うような大学卒業のお礼参りが動機だった。だが、お礼参りとしては、時間もかかり、精神面肉体面での困難も予想される遍路をあえて選ぶということが、宗教心の現れであるといえるのではないだろうか。またCは無一文で遍路を始めているが、道中人の心にふれ、それは常に誰かに助けてもらえるという潜在的な甘えがあったからだと感じ、常に人は他人との関わりの中で生きていた。そして後にその過程を振り返り、助けが自分を通して弘法大師に向けられたものであると受け止められるようになっていった。

調査対象者D(以下D)は、あくまで修行の一過程として遍路をとらえ、特別な成果は期待せず、遍路を始めているが、先達としての弘法大師を支えとしながら宗教を学問的に考え、最終的には真言行人としての自覚が深まっていた。Dの特徴としては純粋に弘法大師を信仰する気持ちと学問的に宗教をとらえようとする気持ちが同時に存在すると考えてもよいだろう。

表1 徒歩遍路体験者の実態的側面

	A	B	C	D	E	F	G
年齢	55	39	47	50	43	30	61
出身	北海道樺戸郡	鹿児島県薩摩郡	佐賀県佐賀市	福岡県北九州市	静岡県沼津市	三重県四日市市	和歌山県高野町
回数	4	1	1	1	1	1	1
日数	42	44	48	30	1ヶ月半	43	64
経費	15～16万	0(銭別3万)	5万	5万	往復の交通費	30万	覚えていない
宗教	真言宗	真宗	禪宗	真言宗	真言宗	真言宗	真言宗
接待	金、食事、宿	宿、米、金、弁当、車	金、米、車、宿	宿、昼食、車、菓子	宿、金、食べ物	車、金、食べ物、宿	宿、食事
目的	信仰のため 精神修養のため	生活の感謝	いったら何かが 見つかるかも	信仰のため 精神修養のため	先達の御大師様 の後を歩きた かった	信仰のため	精神修養のため

表2 徒歩遍路体験者の心理的側面

	A	B	C	D	E	F	G
遍路の動機	修行の成就 お釈迦様の悟り に達する	大学卒業後修行 を兼ね勤めていた 神社の宮司さん の勧め「自分 自身を見直すよ うに」といわれた	お礼参り(大学 へ行かせても らったことに対 して)	先輩僧侶の話 を聞いて自分も 行きたいと思っ ていた。またお 坊さんとしての 進路に迷ってお り、取り敢えず 行ってみた。	先人と同じ体験 をしたい(全く 同じとはいえな いが、人間の生 のものを味わっ てみたい) やっ ぱり四国が御大 師様の足跡だか ら。	勧められて 現実逃避(修行 の寺から実家の 寺へ移る転機)	寺の修理費を集 めるのに、まず 自分を清らかに やり直す(白紙 の状態)にしよ うと思った。
遍路中の心の支え	御大師様、仏様 なので先達とし て導いてくれる ので心強くてど こへでも行ける	弘法大師をはじ め、先師が何万 人と歩かれたこ の道を金剛杖を 持つことで大師 様の同行二人 だと感じた。	誰かに助けても らえるという甘 えからくる安心 感。	伝統ある遍路故 に弘法大師をは じめ諸先達への 思いが一番心の 支えになった。	行雲流水の精神 (何にもとらわ れず気ままに行 ける状態だから こそ乗り越えら れた)	弘法大師	辛いことはお大 師様のお試しと 有り難く受け 取った。
遍路中の感情状態	仏の慈悲 (実際に存在す るかどうか見え るわけではない がこちらの努力 の状態によって 手をさしのべ 救ってくれる)	人間は一人では 生きられないも のだということ 人の温かい心や 自然の素晴らし さからこう感じ た。	自分一人では一 日でも過ごせな い。	身体的苦痛 四国山野の自然 のこと 密教の将来の可 能性 日本古来の自然 信仰及び仏教、 密教の結びつき	感謝の心 どんなに科学が 発達しても人間 の心のスピード は変わらない 時間をふんだん に使う贅沢さ	生かされている 自分はすごく小 さい はりがある時は 進んでいけるけ れど、支えがな くなると人間は もろい	*下段の変化と 同じ
自己変容	色々なお供え物 は実際には仏様 がもらうわけ はないが、お供 えする気持ちが 仏様に通ずる、 ということを確認 できた。	自分は宗教家故 に人の役にた ちたいという心 が強く芽生えた 感じ 弘法大師の教え を広めていく自 信	浄財やお接待は 自分自身にされ ているのではなく 御大師様にく ださっている。	修行の一段階を 終えた喜び真言 行人としての自 覚が深まり、仏 法に対する姿勢 がしっかりした 遍路の乞食生活 が自身の原点と 確認	何もかも自分で する ガラス越しと生 の違いの重要性 自分が小さいも のだと思う	客観的なものの 見方ができるよう になった	信仰が確立した (お大師様が今 もなお我々衆生 を守ってくださ っていることを 理解はしていた が採擇すること によって確かに)

調査対象者 E (以下 E) は、動機が先人 (弘法大師と弘法大師をしたって遍路をした修行者たち) と同じ体験をしたい、つまり全く同じとはいえないだろうが人間の生のものを味わってみたいという気持ちであったことと、巡礼の原点として四国を意識していることから、宗教心の強さ故に始めた遍路のように思われる。しかし遍路中一人では生きられないと感じたことから、周りの助けの力への感謝、また時間にとらわれることなく過ごせることの贅沢さなど、取り巻く環境の中で宗教と離れたことを感じていた。心の支えは何かという問いに対しては、行雲流水(行く雲のごとく、流れる水のごとく)の精神をもてる状態だからこそ乗り越えられた、というように、支えを弘法大師に求める他の調査対象者とは違う答えが得られた。

調査対象者 F (以下 F) は、動機として他者から勧められたことをあげ、また現実逃避の気持ちもあったと述べていることから、宗教的動機とは言い難い。また自分の無力さや周りに助けられていることを認識し、最終的には客観的なもの見方ができるようになった、というように、取り巻く環境の中で宗教家としての自分というよりも一個人としての自分を自覚していた。しかし心の支えとしては、弘法大師をあげるという宗教心のある一面も見えた。

調査対象者 G (以下 G) は、動機は寺の修理費を集めるのにまず自分を清らかにやり直すという宗教色の濃いものであり、辛いことも「大師様のお試し」と有り難く受け止める姿勢を持つなど常に宗教心を持ち続けていた。変化としても今まで頭でしか理解できてなかったことが確信に変わり、信仰が確立したというように宗教心が深まったことがみられた。

こうした遍路体験者を input 変数として巡礼行動への動機、output 変数として巡礼行動の残効効果という二つの次元からパターン化してみよう。横軸に宗教的動機の強-弱、縦軸に巡礼の結果として、僧侶としての自覚深化—個人としての自覚深化という次元を取り、面接結果をもとに、7人の遍路体験者を位置づけたのが図1である。

縦の軸は、対他意識性(役割意識性)—対自意識性(内面意識性)、あるいは公的自己の深化—私的自己の深化と呼んでもいいのかもしれない。AとGは、巡礼前から元々宗教的動機が強く、巡礼の結果、僧侶としての自覚や信仰心を更に確立していった人々である。Eは、巡礼前から宗教的動機は強かったが、巡礼経験が一個人として自分を深く見つめる方向に強く作用した例である。Bは、宗教的な動機は巡礼前はそれほど強くはなかったが、巡礼後、僧侶や宗教家として役割知覚

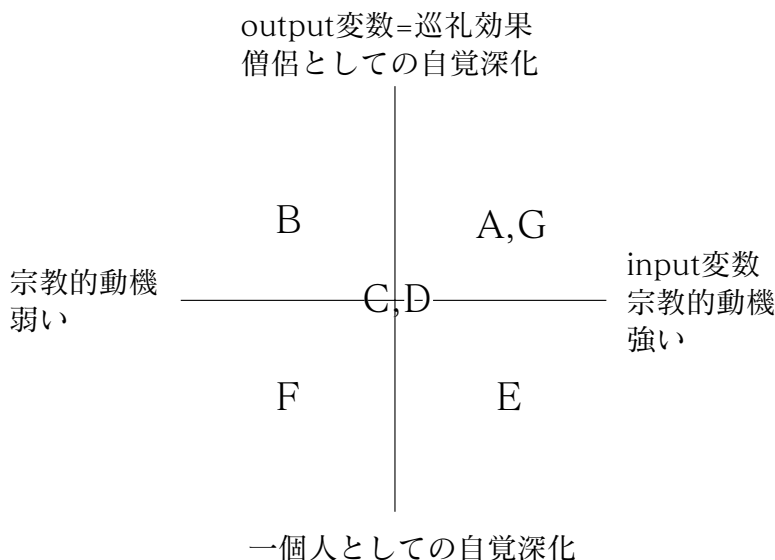


図1 遍路体験者のパターン化

が高くなった。Fは、巡礼前は宗教的な動機が低く、巡礼後個人としての自己深化に向かった。CとDはいずれの次元においても中間に位置する僧侶で「自然派あるいはあるがまま派」とも呼べるものである。説明が難しいので、少し長くなるが、Dの心情がよく表れていると思われる、インタビュー内容の部分引用する。

「そうですね。僕の場合はね。他の人はまたまあ僕の知っている人は大体そうですけどね、課題みたいなものですね。いつかそれを消化しときたいというのがありますね。大体、本来の修行というのはそんなもんじゃないです。これだけのものがあるって、これだけのものが成るといって、ものはないですね。あいまいな中にそんな時期が来たかなあとやってやるのが本当ですね。極端な話がオウムの話じゃないけど、100日間、こういう修行をしたからこういう結果になるっていうあんまり本来そういう伝統的なことは考えないですね。師匠や先輩のアドバイスを聞きながら、自分もこういう具合にやってみようかなと思ってやってね、終わったからといってなんだかよく分からないなあって、それが普通ですよ。そういうのがいちばん健康的ですよ。これだけやったからといって、これだけのものが得られると正解があるっていうね、そういう現代的な発想をするのが、あんまり本来の高野山の修行とはなじまないですね。みんなあいまいなものに触れて、でもなんか良かったななんてね、そういう非常にいい加減というかね、そういうのが健康的だよ。だからよく四国をまわると言ってる、なんか特別にいいものがあるという説明の仕方は僕は嫌だしね。同行二人という弘法大師さんと一緒に歩くってあるけどね、そういうはっきりしたイメージをもって歩く人もいれば、なんかぼーっとして歩く人もいる。僕なんかぼーっとして歩くけどね。お大師さんと一緒じゃかなわん。なんか四六時中監視されているようでね。あんまり大きな声で言っちゃいけないけど。ありがたいと思わなくちゃいけないんだけど。動機はそんなとこです。いい加減というのが結構いいんじゃないかというね、なまじ最初っからあんまりはっきりした目的とかもって行ってその目的が得られなくて失望し

たりね、そういうのはあんまりなじまないですね。」

次に心の支えとしては、調査対象者が僧侶ということもあり、7人中5人が弘法大師をあげるという結果になった。その中でEが「行雲流水の精神が支えである」といっているのは心の持ち方を重視している点で、僧侶以外の人が遍路をする際の心の支えに近いとも考えられる。

面接調査を行っている過程で気づいたこととして

(1) なぜ四国を選んだかという点で、もちろん弘法大師の修行の場であったこともあるが、四国の自然環境の素晴らしさも一要因であった。例えばDは感じられたこととして四国山野河川の自然のことをあげている。「空気もきれいだしね。四国の自然というのは独特のがありますからね」。自然環境は、それが動機づけ的な要因となるにせよ、巡礼効果を高める要因となるにせよ、環境や場として大きな影響力を巡礼者に与えるように思われる。

(2) 調査対象者が真言宗の僧侶だけに、当然のことながら霊場修業型が多かった。また、一般の人々よりも遍路にかかる時間というものを持っていたということは大きなポイントであるといえるのではないだろうか。というのは、一般の人々が、遍路のために十分な時間的余裕を持つことは、周囲の人の理解という点からも、金銭的な面からも難しいからである。今後僧侶以外の巡礼体験者を対象に面接調査を行う必要があろう。ただし、徒歩巡礼者は母集団が小さく、調査対象者を見つけるのがとても困難である。インターネット上に公開された巡礼手記や出版された本等を内容分析することで、巡礼者の心理状態を探る等の方法も考えられる。

最後に本研究では調査対象者が僧侶ということもあり、方向性は僧侶としての役割であれ、一個人であれ異なるが、自己深化という面では共通性が見られたが、巡礼過程においては、精神の癒しや治療効果があるように思われる。今後、巡礼行動の結果として生じる治癒過程が森田療法や内観療法による治療過程とどのように関係しているのかを明らかにする必要があるように思われる(堀

井・藤田・黒田・秋山、1999)。また、自己の内面への探求、自己発見、客観的自己の認識等、瞑想治療と呼ばれる治療法と巡礼行動は密接な関連があるように思われる。とりわけ、一週間研修所に宿泊し集中的に内観する集中内観は、日常的な刺激からの遮断状況であるとともに、他者からの妨害や生活上のわずらわしさから解放されているという意味では、保護された状況である。日常生活の場から切り離された、聖なる空間内での巡礼行動と類似した状況である。治療とは一種の自己変容であるから、巡礼行動中の自己過程との類似点や相違点を明らかにする必要がある。

引用文献

- 青木 保 1994 御嶽巡礼 講談社学術文庫
 藤原武弘 1998 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (1) 中国四国心理学会論文集 第31巻99
 藤原武弘 1999a 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (2) 日本心理学会第63回大会論文集 71
 藤原武弘 1999b 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (1) 関西学院大学社会学部紀要 82号 157-168
 Genep, A. V. 1909 Les rites de passage. Emile

- Nourry 綾部恒雄・綾部裕子訳 1995 通過儀礼 弘文社
 堀井茂男・藤田英彦・黒田重利・秋山一文 1999 森田療法と内観療法の相補的利用内観研究 第5巻 第1号 39-47
 梶原景昭 1994 解説 青木 保 御嶽巡礼 講談社学術文庫
 前田 卓 1971 巡礼の社会学 ミネルヴァ書房
 宮崎建樹 1997 四国遍路ひとり歩き同行二人 へんろみち保存協力会
 長田攻一・坂田正顕 1998 現代に生きる四国遍路道 - 四国遍路の社会学的研究 図書センター
 芳村超全 1999 新・四国平成義塾'99テーマ「道」徳島新聞 1999年11月21日

付記1：本研究は、1997年度 関西学院大学共同研究費一般A、ならびに、平成9・10年度文部省科学研究費補助金（萌芽的研究 課題番号09871031代表者藤原武弘）の助成によるものである。

付記2：本研究の資料は、藤原武弘指導のもとに作成された次の卒業論文から得ている。記して感謝の意を表す。板倉理恵・川口 愛 「巡礼行動の意識に関する社会心理学的研究」関西学院大学社会学部1997年度卒業論文

A Social Psychological Study of Pilgrimage Behavior as Self Process(2)

ABSTRACT

This study aims to describe and analyze the pilgrim's behavior of Shikoku Henro from the point of view of self process. Interview subjects were 7 priests who had visited the 88 sacred places and temples in Shikoku Island by walking. The results indicated two dimensional factors involved in the process of pilgrimage behavior; motivational input variable i.e.intensity of religious faith and output variable i.e. after effects of pilgrimage behavior.

Key words: pilgrimage behavior, self process, Shikoku Henro